

6 月から、私たちが属しているホーリネスの群れが掲げている四重の福音である、「新生・聖化・神癒」を見て参りました。本日はやっと最後の「再臨」に辿り着きました。再臨とは、イエス様が再びこの世においてになること同時に終末の時でもあります。内村鑑三の「[一日一生](#)」という本がありますが、再臨についてこのように記されています。

「キリストの再臨は世の終局の出来事である。そして万事万物は、すべてことごとくこの喜ぶべき最終の出来事に向かって進みつつあるのである。私たちが日々キリストの再臨を待ち望むのは、それが時々刻々と私たちに迫りつつあることを知っているからである。私たちはすでにキリストのものとなって、全世界の出来事はこぞって私たちを希望の域に向けて進みつつあるのである。」

キリストの再臨がいつであるかを正確に知ることは、われわれにとって、余り重要なことではありません。大切なことは、その再臨が、いつわれわれに臨もうとも、いつも準備ができているように生活する、ということなのです。イエスは、再臨の時については、天の御使いたちも知らず、大音響が鳴り渡り、もろもろの天は裂け、キリストとその天の軍勢が再び人類の目の前に現れる、その時が、いつおこるかは、だだひとりの神のみが知っておられる、と言われました。・・・熱心な「御国を来たらせ給え」という祈りが、ついに聞かれるのです。これがクリスチャンの希望なのです！

私たちは日々、主の祈りで「御国を来たせたまえ」と祈っています。私たちの歩みは天の御国へ向かっており、それは喜びの生涯であるということを再度確認したいと思います。本日の箇所は、イエス様が十字架に架かる直前にかかれたもので、天の国・終末についての譬え話です。それは結婚式のような喜びの出来事として記されています。つまり、終末、世の終わりの時は、恐ろしいものではなく、喜びの婚宴のようなものであるということです。ですから、本日は、私たちの先に備えられているのは「喜び」であるということを再確認したいと思います。

まさか！

本日の箇所には 10 人のおとめが出て来ますが、2 節に記されているように、「愚かなおとめ」と「賢いおとめ」の話です。10 節には、花婿と一緒に婚宴の席につくものと、そうでない者があると記されています。何がそのように分けることになったのでしょうか。それぞれ 10 人とも同じように灯を持って花婿を迎えに出ていきました。しかし、5 節にあるように、花婿が来るのが遅いので、皆、眠り込んでしまいました。皆が眠ったとあります。違いは、油の用意をしていなかったものと、用意をしていた者です。つまり花婿が来るときに備える油を用意していたか、持っていなかったかという事です。

この油とは、宗教改革者であるルターは信仰だといっています。10 人とも信仰はもっていましたが、5 人のおとめはイエス様の再臨に、将来に望みをもって生きていたのです。他の 5 人は今の現実しか見ていなかったのです。イエス様が来られる時、再臨の時は誰にもわからないといわれています。そこで、旧約聖書・創世記 6 章～9 章に記されている、ノアの箱舟のことを思い起こしたいと思います。人間の罪のために、神は洪水で地上の生き物を滅ぼすことを決意しました。しかし、いきなりではなく予告されていたのです。それにも拘わらず、ノアの家族以外は神の言葉を信じず、従わなかったので滅ぼされました。それは今のこの現実のことで心がいっぱいになっている状態です。まさか、神の裁きがくるとは思わなかったと、そう思ったことでしょう。

私たちは信仰告白で「・・・かしこより来たりて」と唱和しています。本日も告白しました。私たちは限られた時間の中で死を見つめながら生きています。そこでもう一度自分の心に聞きたいと思います。花婿であるイエス様の前に生きてきたか。イエス様が再びくることを待ち望んでいるのか。現実しかみていない生活か。若しくは、喜びをもって備えながら再臨の時を待っているのか。

賢いおとめたちは、花婿を迎えて婚宴の席に着くまでのことを考えていました。花婿は遅くなるかもしれませんが。しかし到着がたとえ夜中になろうが、とにかく待つて迎えるつもりでいたのです。そのために、ともし火だけでなく、一緒に油も備えました。そのように、先のことまで、終わりのところまでを視野に入れて考えていました。

一方、愚かなおとめたちは、その時のことしか考えていませんでした。同じように灯し火を持って出ました。しかしそれは夜で暗かったから、「今」必要だから持って出ただけの話です。待つて迎えて婚宴に至るところまでは考えておらず、油は用意してはいないのです。そのように目先のことしか考えていない乙女だったのです。

眠りこけていても

私たちの歩みは、唯、漠然と起こる世の終わりに向かっているではありません。救い主であるイエス・キリストが再び来られる時、その喜びに向かって生きている筈です。それが私たちが待ち望む信仰であります。淡い期待でもなく、虚しいものでもありません。イエス様の再臨を待つということは消極的なものではなく、この私の所に来てくださる大きな喜びに向かっているということです。

全ての人は花婿が来ることを聞き、その席に招かれています。私たちの信仰生活の究極の目的は、イエス様を待ち望む生き方であります。しかし、信仰生活の中では、眠気がさしてくることがあります。眠りとは、睡眠不足という生理的現象ではなく、信仰の歩みのことを指しています。それはいつでも自分の思い通りにはいかない、期待通りにはならないこともあります。するといつの日か、喜びがなくなってしまい、闇の中で眠りこんでしまうような現象が起きます。

しかし、例え眠りこけているような私たちであっても、「花婿が来た！」という声を聴く時がきます。眠りこけていてもその御声を聞いて飛び上がっても、油をしっかりと準備していれば間に合うのです。そして、いつの日かこの世での本当の眠りにつくとき、人生の終わりの時がやってきます。そこは喜びの婚宴の中で、「善かつ忠実なる僕、よくやった」とイエス様のお褒めのお声を直接お聞きすることができるのです。